

博士論文

『沖縄の下層若者と〈地元〉の社会学——下層労働の再生産と下層若者文化の再編』

特定非営利活動法人
社会理論・動態研究所
打越 正行

概要

本稿のテーマは、沖縄の下層若者の生活と労働である。彼らは〈地元〉に生き、〈地元〉で働く。ただそこは、過酷な世界である。彼らが就く建築業、性風俗業、違法就業といった下層労働は、2000年代に入ってそれぞれの業界は厳しさを増している。また先輩から後輩への暴力や略奪は、容赦なく続いている。なぜ沖縄の下層若者は、労働と生活の面で過酷さをまず〈地元〉に居続けるのか。これが本稿の中心課題である。彼らは暴力的な強いつながりでがんじがらめになり（集団化）、移動が制限される（固定化）かたちで〈地元〉に滞留している。そのような困難も含めて、〈地元〉はまわっている。それは都市下層の人々が労働者として流動的に配置転換され、生活を個人化されることとは対照的である。このような事象を説明するために、〈地元〉を「下層若者が相互に全人格的に関わる社会の基盤」と定義し、以下の2つの仮説を実証する。

仮説1は、「〈地元〉を通じて、下層労働の再生産は展開される」である。沖縄の下層若者は資源の獲得をめざして〈地元〉に集う。同時に彼らは〈地元〉で拘束される。〈地元〉の相互に全人格なつながりによって、彼らは下層労働に適合的な働き方を身につける。〈地元〉は彼らの生活世界であると同時に、苛酷な下層労働への供給源となる。

仮説2は、「〈地元〉を通じて、下層若者文化は再編される。その文化は解体へ向かうのではなく、より不安定なものへと再編される」である。そのつながりは同郷の先輩—後輩関係をア prioriに前提としたり、過去や将来にわたって蓄積されるものではない。そのような前提や蓄積を欠いた状態を回避すべくとられる手法のひとつが暴力である。それにより、先輩—後輩関係は過去や将来にわたりとりあえず担保される。ただし暴力を用いることで通用する関係は、より小規模の小集団となり、そこでは時間感覚の欠如をその特徴として読みとれる。

結論を述べる。本稿の中心課題「なぜ沖縄の下層若者は、労働と生活の面で過酷さをまず〈地元〉に居続けるのか」という問いに対しては、〈地元〉という相互に全人格的に関わりあう社会の基盤の存在が下層若者の労働と生活をまわしてきたという議論を行った。労働と生活が過酷さを増したとしても、仕事を変えたり生活の基盤となる人間関係を変えたりするのではなく、〈地元〉を基盤とする全人格的なつながりの中で過酷な状況に対処しようとする。ゆえに彼らは〈地元〉に居続けることとなると結論付けた。

キーワード：

下層若者、〈地元〉、暴力、時間感覚、沖縄、参与観察、生活史、暴走族、ヤンキー、建築業、性風俗業、違法就労